

J F F Wオンライン交流会 第22回 J F F W交流会



消防庁消防・救急課長
石山英顕氏



〈講師〉 守屋智敬氏



〈司会〉 太田博子氏



次期開催地・
青森県のメンバー



走ったり徐行したり、 女性消防職員としての人生を ～石原房江 J F F W 会長に聞く～

大きな写真は2018年7月7日に市川市（千葉県）で開催された第22回 J F F W 交流会（2018年9月号カラーグラビア参照）、写真枠内は2020年10月31日に開催された J F F W オンライン交流会（第24回交流会）（2021年1月号カラーグラビア参照）の様様。

本誌 第24回を数える2020年のJ F F W交流会は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、オンラインによる開催となりました。まず、J F F W交流会について、そして10月31日に開催された今回の交流会の感想を、女性消防職員の現況等についてとともにお話してください。

ともに悩みを共有して 乗り越えていく仲間を作る

石原房江 J F F W会長 J F F Wは Japan Fire Fighting Women's club の略で、女性消防職員が自主的に集まる、全国規模のネットワークです。

1969年（昭和44年）に誕生した女性消防職員の数は、50年経過した現在、全国で4,700人を超え、各々の女性消防職員は予防、救急、警防とさまざまな分野で活躍しています。しかし、消防職員全体の中で女性職員の占める割合は2.9パーセントとまだまだ少なく、同性の先輩や後輩のいない職場で働く女性が多いのも現状です。このように男性が圧倒的に多い職場において、女性消防職員は仕事、家庭、子育て等の悩みを抱えながら業務に邁進しています。女性職員にとって、仕事と家庭、子育て等の両立は大きな課題であり、近年では親の介護や管理職としての悩みなど、新たな課題も出てきています。

そこで、J F F Wではこうした問題を相互に語り、悩みを解消する教えを先輩から学ぶほか、業務に関する情報交換や研修を行うことで自己研鑽し、さらに幅広いネットワークを作って、共に成長していくことを目的としています。この交流会を24年にわたり継続して開催してきました。

交流会はとても緩やかな運営をしています。会員登録をしたり規約を定めたりすることなく、すべての女性消防職員の皆さんがいつでも気軽に平等に交流会に参加できる環境で運営をしています。いわば「来るものは拒まず去る者は追わず」だからこそ24年という長きにわたり、この交流会を継続し、たくさんの参加者を迎えることができたものと思っております。

J F F Wは「ともに悩みを共有して乗り越えていく仲間を作ることのできる」会です。皆さんは5年、10年、20年と働いていく組織の中で、いろいろな立場で

壁にぶつかり、悩み、苦しむこともあるでしょう。女性が周りにいなくて孤独を感じた時、「一人じゃない、仲間がいる！」と思ってほしいと思います。

私はJ F F W交流会を通して頑張っている女性消防職員の皆さんを応援し、キャリアプランを持ち、長く働き続けることができるようにサポートしたいと思っています。

今年は新型コロナウイルス感染症の影響で、青森県での開催を計画していた交流会を来年へと延期することになりました。毎年継続していた交流会が途絶えてしまうことを残念に思っていたところ、オンラインによるJ F F W交流会の開催という企画が立ち上がりました。

実際に開催してみると、オンラインではありますが、皆さんの顔を見てしっかりと意見交換をすることができました。オンラインを新しいコミュニケーションツールとし、セミナーを受講するだけでなく業務別分科会に参加することにより、業務から個人的な悩みの相談まで幅広い交流活動ができると思えました。これからはオンラインを活用した活動についてももっと考えていきたいと思っています。



石原 房江
J F F W会長
(市川市消防局)

市役所に就職、消防局に配属

本誌 石原会長と本誌とのおつきあいは、本誌の特別企画「女性消防職員はいま…」の第1回（2000年12月号）の取材でお会いした時からですから、20年に及ぼうとしています。その後、J F F W交流会でもお会いしながら、消防の状況についていろいろと教えて頂きました。本日は、石原会長が今年度をもって退官されることを機に、石原会長の消防職員としての歩み、救急隊、救急救命士、救急隊長としての活動等に

ついて忌憚のないお話をお聞きしたいと思っています。まず、消防局職員、女性消防職員1期生になられた経緯についてお聞かせください。

石原会長 私は中学、高校時代、スポーツ少年団の指導者として子供たちに剣道を教えていました。その縁もあり、スポーツ少年団の日独交流に参加し、スポーツを通して地域コミュニティを確立している西ドイツの社会スポーツ体制に感動し、社会体育の指導者になることを目標にしていました。知人の勧めもあり、ゆくゆくは社会体育の担当課で仕事をすることもできる市役所に就職することにしました。

市役所ではどのような仕事をするようになるのだろう、と様々なことを思い浮かべていると、配属されたのは消防局でした。私が消防に入ったのは1976年（昭和51年）9月13日、市川市では女性消防職員がまだ採用されていない時代でした。

男性ばかりの職場は当時の私には異様な印象で、どうしてもここで働かなければならないのだろうかと思ひました。それでも市役所の社会体育の担当課に異動することを希望して消防局での勤務を続けたものでした。消防局での勤務といっても勤務部署は総務課経理係の事務職員としてでした。業務内容は、消耗品管理や経理事務、幹部の指示による雑用、来賓の接待等でした。局長室の中のパーテーションで仕切られた机に座り、ほとんど誰とも口をきかず、来客があるとお茶を出し、喋る言葉は「はい」だけでした。

そんなわけで、仕事にもやりがいを持たず、新たな目標を求めて、働きながら大学に行くことを考えました。中学、高校時代に新聞委員会に所属し学校新聞を作っていたことから自分の得意とする分野について学



開会式における「参加者へのエール」



第22回J F F W交流会の開会式（2018年7月7日・市川市）

ぼうと思い、日本大学法学部新聞学科の二部（夜学）を目標に、受験勉強をしました。その結果、運よく合格し翌年から大学に通うことになりました。仕事が終わると電車に乗って大学に行き、夜の10時頃まで講義を受けてまっすぐ帰っても23時をまわるという生活を続けました。

とても忙しくて体力を要する状況でしたが、同級生と話をするのが何よりも楽しかったです。職場で口をきくことができなかったこともあって、同級生に合うと喋りまくっていました。今思うと若いからこそ頑張れたのだと思いますが、当時、通学は全然苦ではなかったです。試験の週に徹夜で勉強しても、翌朝はしっかりと職場に行けました。

当時は一般的に女性が大学に行くなんて生意気だと思われていたと思います。それでも毎日大学に通い続けることで周囲から理解され協力してもらえようになり、上司からも「早く行きなさい」と声をかけてもらうようになりました。

休日には相変わらず剣道やバレーボールのクラブに通って子供たちにスポーツを教えていました。日本スポーツ少年団の指導者として子供たちを引率して、全国のスポーツ少年団の大会に参加したりもしていました。市役所の社会体育課への異動を強く希望していましたが、上司からは消防局から市役所に異動することはないと言われ、その希望が叶うことはありませんでした。それでも大学を卒業するまでは生活のためと思って仕事を続けたものでした。

女性消防職員一期生として結果を

石原会長 そんな日々が3年続き、4年目に市川市消防局で10人の女性消防職員（婦人消防官）を採用することになりました。この頃になると、私のことを理解し応援してくれる上司もいました。その上司に勧められ、防火指導という新たな仕事に就くことを期待し改めて女性消防職員の任用試験を受けることにしました。社会体育の指導者になるという道は途絶えていましたが、相変わらず子供たちに剣道を教えながら過ごし、こだわることもなく女性消防職員という新しい仕事に挑んでみようという気持ちになりました。

そして1980年（昭和55年）4月に市川市で女性消防職員一期生10人が採用され、そのうちの一人として、女性消防職員としての第一歩を歩き始めました。すぐに千葉県消防学校に入校しましたが、大学4年在学中でもあり、消防学校入校中は友人にノートを借りたりして何とか大学を卒業しました。消防学校にはその年、市川市、松戸市、柏市から合計18人の女性初任科生が入校しました。

当時の消防学校には女性のための宿泊施設がなく、理科実験室に二段ベッドを置いて2分隊が一緒に生活しました。年長者の私はそのうちの1分隊の分隊長を指名されました。18歳から22歳までの女性18人が同じ部屋に缶詰めになって、泣き笑いの学生生活を送りました。

女性がともに入校していることで男性入校生の気持ちが緩まないようにという考えがあっただけで、毎日夜中に非常呼集で起こされ、夜中の校庭を何十週も走らせられたり、当時の若い女性には考えられないことばかりでした。私はスポーツが好きで基礎体力があり、朝のマラソンやロープ登はん、操法訓練など、何でも先頭で挑戦しました。学科も頑張っ、卒業時には消防学校の表彰をして頂きました。それまでやりがいもなく漫然と過ごしていた職場から解き放たれ、消防という仕事に就き、新しく学ぶことのすべてが面白く、期待に胸を膨らませていました。

消防学校を卒業し所属に戻ってからの仕事は、建築、危険物、指導などを勉強しながら、「火災予防は幼児から」のキャッチフレーズのもとに幼稚園や保育園



分科会でのディスカッションの様

を訪問し、音楽隊と一緒に歌を歌い、腹話術、紙芝居、人形劇を通しての防火指導を行う予防業務でした。

また、消防局は当時、一人暮らしの高齢者宅を訪ねての防火診断も重点施策としており、お年寄りのお宅に訪問し長話をしたりすることもよくありました。

女性消防職員の中で一番年上であった私は、何を行うにも一番に指名されました。千葉県自動車安全運転競技大会に出場して優勝したり、千葉県の消防職員の意見発表会で入賞したりしたものでした。女性消防職員一期生としてとにかく結果が残せるように、夢中で懸命に取り組みました。気合が入りましたね。

仕事を辞めなければならない？

本誌 結婚、出産と消防業務との両立についてお聞かせください。

石原会長 当時、女性は結婚すれば寿退職をするもの、子供を産んで仕事を続けるなんてもってのほか、というような社会の風潮が消防にもあって、同期の女性消防職員の仲間が2～3年のうちに、結婚や出産を機にひとりふたりと退職していきました。10人採用された同期の女性は全員退職し、ひとりもいなくなってしまいました。私も時代の風潮を感じていましたから、結婚して子供ができたなら仕事を辞めなければならないものと感じていましたが、消防の仕事を覚えてやりがいを感じており、何とかして辞めずにいたいと思っていました。同期の仲間とは今でも会いますが、辞めなければよかったという声も聞きます。

私が女性消防職員になった当時は、全国消防長会関東支部が主催する女性消防職員の研修会が行われてお

り、そこに私たちも参加しました。その研修会で、ある他都市の女性消防職員一期生の女性と知り合うことができました。とても素敵に輝いている方だったので、写真を一緒に撮って頂きました。その方は後年、その年に開催された研修会で講演をされ、ご自身の生き方について話されました。その方の生き方に自分の生き方が重なり感銘し、組織も立場も違う方ですが、消防の先陣を歩いている先輩として憧れました。

その後、結婚の話がありました。主人とその父親も消防職員で、結婚したら私が仕事を辞めるものと思っていました。しかし、私は専業主婦になる気にはなりません。25歳で結婚し、26歳で第1子を授かりました。

子供ができたので仕事を辞めなければならないのかと悩み、一緒に写真を撮ってもらった、あの憧れの先輩に思い切って相談の手紙を書きました。しばらくして、その方から返事を頂きました。手紙には「働くことは生きること、あたりまえのこと、子供にも働く姿を見せて、苦勞をしても一緒に生きていけばいい」と書かれていました。働くことは生きること。そういえば私の母も女手一つで私を育てるため、花屋をやって一生懸命働いていました。私自身も小学校のころから花屋を手伝って店番をして一緒に生きてきました。その母の姿を思い浮かべ、「当たり前のこと、一緒に生きること」に納得しました。

そしてもう一つ、「経済的な自立があれば、不幸を回避することができる」というアドバイスに心が動きました。お金で幸せは買えないけれど、不幸は少しでも回避することができる、と考えたのです。母に何かあった場合に支援するためには、経済的な余裕がなければなりません。お金はとても必要なものだったので。後年、主人の親と自分の親を介護する立場になって、働いていてよかったと身に染みました。

それでも、当時の消防では、子供がいて働くことが当たり前とは思われていませんでした。職場の先輩からも、この世界で生きるには子供は一人までというアドバイスも受けたものでした。

子供がいるからという理由は通らない

本誌 消防士長に昇任された頃のことについてはいか

がでしたか。

石原会長 1983年（昭和58年）1月に結婚して、しばらくして妊娠し、その年に初めて昇任試験を受けることになりました。頑張った結果、一次試験に合格し、県による二次試験を受けることになりました。二次試験を受ける頃にはお腹が大きくて制服を着られなくなり、マタニティで試験を受けました。こんな状態では試験なんて受かるかわからないし、受験することがいいことなのか悩みました。試験会場にいくと女性は私ひとり、それもお腹が大きいことから、好奇の目で見られていると感じました。それでも頑張って受験し、二次試験も合格することができました。

翌年2月に第一子の女の子が生まれ、4月に昇任辞令を頂く時にはまだ産休中でした。上層部の幹部から産休中であることを指摘され、昇任を遅らせるという話がなされましたが、当時の消防長が「産休は病体ではない、特休だから問題ない」と4月に昇任辞令を届けてくれました。こんな時代でも応援してくれる人がいるのだ、と感じました。

産後8週の産休が終わり、消防士長としての勤務が始まりました。一緒に働いていた男性の先輩から「士長の階級になったからには、子供がいるからという理由は通らない」と言われました。

当時、予防課の危険物を担当していて、女性2人で検査のために出向しました。事業所の方からは「女性は融通が利かない」などと嫌味を言われたりもしましたが、職場の上司は平等に扱ってくれました。コンビナートの施設の配管の気密検査に上司と2人で行き、4メートルの高さのパイプラックの上に上がった時にも「ここから二手に分かれて検査をする」と指示され、一人で任され、パイプの上を歩き石鹸水をかけて検査をしました。危険がある現場でも上司が男性と差別することなく扱ってくれたことに感動したものでした。

働くことは生きること、当たり前のこと

本誌 その後、育児と業務についてはいかがでしたか。

石原会長 主人の両親が同居していたので仕事に復帰したはじめの頃は子供の世話をしてもらえましたが、その後、義父が病気で入院することになり、義母が義父を介護することから子供の世話をすることができな

くなりました。

保育園を探すことになりましたが、親と同居していることで保育園に受け入れてもらえませんでした。市の担当者から補助はなくなるが私立の保育園なら枠があることを聞き、私立保育園を探しまわりました。キリスト教の関係する私立の保育園を見つけ、高齢の園長先生の配慮により正規の額よりも安い額で預かってもらえることになりました。

長女は2歳になる少し前で、2か月くらいの間は保育園の環境に慣れずに、毎日大泣きをしていました。子供が泣くたびに後ろ髪をひかれ、働くことに後ろめたさや疑問を感じて悩むようになりました。

そんな折、長女の通っているその保育園で、私が仕事で腹話術による防火指導を行うことになりました。腹話術の人形を抱えて会場に入っていくと、目の前で娘が私を見ていました。「皆さんこんにちは。消防署からお友達を連れて来ました」と語りかけると、娘はどこかのお姉さんが話をしているという感じで最後まで黙って聞いていました。最後に「今日はお話を聞いてくれてありがとう」と言ってバイバイと手を振った瞬間に、娘が我に返ったように「ママ！」と叫んで泣き出しました。

その日、娘を迎えに行ったら、園長先生が「初めての経験ですね、帰って娘さんと一緒に食べてね」と、ケーキをプレゼントしてくれました。その心遣いに温かさを感じ、娘に自分の仕事姿を見せることができたことに何とも言えない思いが込み上げました。

その後は、私が腹話術のお姉さんであることが娘の自慢になったようで、娘は家で練習中のシナリオを聞いては本番でネタばらしをしたりするようになりました。



盟友・長谷川由佳氏（松戸市消防局）（右から2人め）らと



懇親会における事務局メンバーの紹介

た。子供が母親の仕事を知る機会に恵まれることは、大変幸せな事だと思います。「今日は何のお仕事?」「うん、お茶くみ」「どこで」「消防広場でね」「ふーん」。そんな会話をいつもしていました。「ママのお仕事はお茶くみだよ」と保育園で言われたのには苦笑でした。

消防士長として男性と同じように働かなければ、との気負いや責任感から、娘を保育園に預け、迎えに行くのが遅くなるが多くなる状態で仕事を続けたものでした。

次に男の子が生まれました。今度は両手に子供の手を繋いで、保育園と職場を駆け回りました。女性の同僚からも「子供を遅くまで保育園に預けるなんてかわいそう」とか「私はあんなことできない」などとささやかかれ、「かわいそう」「不憫」という言葉が重くのしかかって、子供を預けて働くことに罪悪感を覚え悩みました。

そんな思いからついつい子供を甘やかしてしまいました。子供も自分はかわいそうだから、甘やかされるのが当然だと思って、わがままになっていました。そんな子供の気持ちを感じるようになり、そんな関係はよくないと気付きました。そうだった！働くことは生きること、当たり前のことでした。子供がさみしい、不憫、かわいそう。そう子供が言っているのでしょうか？そうではありません。周りの風評を気にして、よいお母さんと言われたかっただけだったので。そのことに気付いてからは、臆することなく堂々と子供と向き合うことにしました。

お母さんは頑張って働いているから、しっかり見てね、一緒に生きてね。そんな気持ちで過ごすようにしました。ある日いつものように走りながら保母さんに

「すみません」と言って保育園に入っていくと、長男が「ママ、遅くお迎えに来て」と言いました。「遅くお迎えに来てなんてどうしてだろう」と思いましたが、幼い息子が私の「いつもすみません」と頭を下げて入っていく姿をみて気遣ってくれたのでしょうか。私の応援をしてくれたのかも知れません。一番の応援団でした。主人は当直勤務で、主人の当直の日は母子家庭なので、子供たちと私だけの時間を過ごしました。時々保育園の近くのファーストフードで食事を済ませ、隣にあったレンタルビデオで漫画のビデオを借りて帰り、子供たちがビデオを観ている際に家事をこなしていましたが、楽しく過ごしていたことを思い出します。

職場には相変わらず、消防で子供が2人もいて働くことをよくないという風潮がありました。3人目の子供が生まれて、3人も子供がいてまだ辞めないのかと言われていたような圧力を感じたこともありました。退職届を書いて、翌日に提出することを決めたこともありましたが、しかし、冷静に考えてみると、なぜ私は辞めなければならないのだろう、と思いつどまったり、退職届を出しさえすればいつでも辞められる、もう一日勤めよう、と先延ばしにしたりして、三年ほどの間バッグに入れたままにした退職届はボロボロになりました。いつ辞めてもいいと思うと、肝っ玉も据わり怖いものがなくなり、やりたいように仕事をすることができたように思います。

昇任試験にも合格することができず、予防課の危険物の担当として14年にわたり勤めました。職場では口惜しく辛い思いをしたこともありましたが、それでも私を認めて応援してくれる上司もいました。市民のために働いているのだから、市民のためによいと思うことを選択する物差しを持って働けばそれでよいと思っていました。

災害現場には女性がいるべき

本誌 男女雇用機会均等法（1985年制定）の影響についてはいかがですか。

石原会長 1999年（平成11年）には男女共同参画社会基本法も施行され、「男女共同参画」の風が吹き始めました。

以前は、子供がいるのだから辞めたほうがよい、と

いう言い方をされたのに、上司から子供はいくつになった？ 長く働き続けることが新しい風潮であるように言われるようになりました。

昇任試験にもやっと合格し、1993年（平成5年）4月からは消防司令補として勤務しました。その年の11月、消防長に呼ばれ、女性の救急隊員第1号を引き受けてくれないか、と言われました。

救急隊員？ サイレンを鳴らして現場に向かうの？

当時の私には、まさに寝耳に水、青天の霹靂でした。しかし、消防長の強い要請から、救急隊員になることを引き受け、翌月の12月からの約2か月にわたり、3人の後輩とともに、千葉県消防学校の救急標準課程に入校しました。

消防学校の宿舎が空いてなかったことから、私たち女性4人は宿泊が出来ず、通学することになりましたが、夜中まで家事をして朝5時台の電車に乗りながらも、何とか教育課程を卒業し、毎日勤務で救急車に乗る実習が始まりました。ベテランの救急隊長のもと、一から救急業務を始めました。

救急車に乗って勤務し始めて1週間と経たないある日、高層ビルから飛び降りた女性が2階の屋根に倒れているという現場に出動しました。落ちた衝撃が強く、明らかに絶命している様子でした。救急隊長と一緒にそばに行って、社会死の状態を確認し、自分の仕事が人の命のすぐそばにある事を思い知りました。生易しい仕事ではないと覚悟を決めました。

そしてこの年の4月からは救急課救急係に配属され、3か月交代で東西の消防署の日勤救急隊として勤めました。36歳の時でした。始めは4名乗車でしたがその後は3名乗車になり、救急隊員の一人として救急業務をこなしました。一緒に仕事をする男性職員も初めは「なんで女が救急隊なんかやるのか。女にできるのか」と言わんばかりの様子で、とても戸惑いました。

そして1995年（平成7年）4月から女性消防職員が東西南北の消防署及び指令課に配属され、10月から当直で勤務し始めました。私も西消防署に配属され、第一救急隊の隊員として勤務し始めました。

私は消防司令補の階級でしたから代理の救急隊長を任されることもありましたが、当然経験がなく、たった2か月の救急の教育で十分な対応ができたとは言えませんが、予防経験からの市民とのコミュニケーション

をとること、自分が子育てをしていたこと、義父の介護などの経験があるからこそ対応できることがたくさんあると感じました。

女性消防職員が救急車に乗ることで、女性や高齢者の傷病者には安心する、話しやすい、女性でよかったなどと言われました。出産が始まった女性の観察をした時は自分に置き換えても、女性でよかったと思いました。

傷病者の半数は女性です。救急は災害と言っても、日常の出来事だと思います。日常の中で男性は男性に救護されたいと思うし、女性は女性に救護されたいと感じると思います。私自身はそう思います。まして災害で被災された人は心に傷を受けて憔悴しているでしょう、そんな中でも同性に救護されることが、ささやかな心のケアになるのであれば、当然その場に同性がいるべきだと思います。だからこそ救急現場や災害現場に女性は当たり前にいるべきであると思いました。

もっと知識を、もっと技術を学びたい

本誌 救急隊長としての活動についてお聞かせください。

石原会長 救急隊長に任命され、男性の隊員を部下として活動するようになりました。当時はまだ女性がサイレンを鳴らして救急出動をするという認識がなかった時代ですから、男性職員に馴染んでもらうまでには時間もかかり、まして女性が隊長を務めることには、少なからず抵抗があったと思います。酔っ払いのケースや加害現場で女性は大丈夫かとか、非力な女性がいると足手まといになるという声もありましたが、搬送支援を呼ぶこともなく三人で活動しました。体重の重い男性を乗せたストレッチャーを持ち上げるなど、女性という区別なく活動しました。酔っ払いにもからまれたこともなく、すみませんと謝られたり、おふくろみたいだなどと言われ、言うことを聞いてもらっていたように思います。後で聞いた笑い話ですが、同じ隊の若い隊員が、もし加害現場に行くことになったらこの女性隊長をどう守ろうかと悩んでいたそうです。

ある日、搬送先の診療所で搬送証の受け取りを待っていると、「主人が…主人が…」と女性が駆け込んできました。隣接のマンションの住人でした、救急車を



2014 (第18回) J F F W 交流会 (横浜) (本誌 2015年3月号)



2015 (第19回) J F F W 交流会 (名古屋) (本誌 2016年2月号)

マンションに回させ、女性の後についていくと、男性が部屋で倒れていました。意識がなく、嘔吐して軒をかいており、脳神経外科選定で指令課に病院交渉を依頼しました。当時の病院交渉は指令課に依頼することになっていたため時間がかかり、市内の二次病院への搬送が決まりました。

その病院での診察結果でも膜下出血と診断され、市外の三次病院への転送となりました。搬送中に時々呼吸が止まるのでバグマスクで補助換気をしながら心臓が止まらないようにと願って搬送しました。

病院に着いて医師に病状を聞くと脳室いっぱいに出血が広がり、重篤な状況でした。同乗した奥さんに手を握られ、「私は子供もなく主人だけが頼りです、助けてください」と泣かれてしまいました。私は何もできずただ話を聞くだけでした。

もっと早く市外の三次病院へ搬送できなかったのか。自分の知識のなさ、技術の無さ、自信の無さを考えました。私という救急隊長に出会って、その人の人生が変わってしまうかも知れません。

病院選定一つでその人の人生が変わってしまうかも知れない、もっと知識を、もっと技術を学びたい。その思いで救急救命士の局内の選抜試験を受けることにしました。5年または2,000時間の実務経験の条件を満たすために2,000件の出場を経て資格を得て、40歳で局内の選抜試験を受験しました。救急救命士の選考には年齢制限があったのでまさに一発勝負でした。

そして選考試験に合格し、平成11年（1999年）4月に救急救命東京研修所に入所しました。この年は、長女が高校、長男が中学に入学する年で、親子ともども同じ日が入学式でした。

ママは人を助けるために

本誌 そして救急救命研修所に入所されるわけですね。

石原会長 東京研修所、九州研修所を含めて研修所に女性が入所するのは初めてのことで、6か月間にわたり299人の男性の中で女性1人の状況での研修となりました。はじめの挨拶で「この6か月間、私は女性を捨てます」と言いました。学校側も「特別な扱いはしない」とすべての研修を同じプログラムで受けました。

女性が一人だけということで、1か月間は一人で寮室に閉じこもり勉強をしていましたが、授業以外は誰とも口をきかないで閉じこもっていたことから、段々勉強が手につかなくなり、不安でいっぱいになりました。そんな時に、同じ県の消防本部からきている皆さんに声をかけてもらい、一緒に学ぶことで助けてもら

いました。

6か月間の入所は家庭にも負担をかけました。それでも、子供たちは私が研修所に行く意味を理解して応援してくれました。長女はお母さん代わりになって弟2人の面倒を見てくれました。この時は、子供が3人いてよかった、と思いました。子供たちが仲良く助けあって、私を助けてくれました。主人が小学生の二男に、お友達みたいにお母さんがいつも家に来てくれた方がいいだろう、と意地の悪い質問したところ、「ううん、僕は寂しくなんかないよ、ママは今人を助けるために勉強に行っているから、帰ってきたらまた人を助けるお仕事をするから、僕は寂しくなんかないよ」と答えたそうです。その言葉で主人も思い直して頑張ってくれました。

判断、病院選定は正しかったのか

本誌 救急救命士として活動されてからのことについてお願いします。

石原会長 6か月間の研修を終えて、当時はまだ数少なかった救急救命士の一人として救急業務に戻りました。当時は救急救命士の乗っている救急隊が少なかったため、救急救命士の対応事例には同時出動で市内全域に出動しました。救急隊長として活動していましたが、救急救命士という看板が、男性職員の「女性である」という認識を吹き飛ばしてくれたように思います。しかし、救急現場には研修のようなスムーズな活動現場はなく、挫折と安堵の繰り返しでした。

救急救命士として業務を開始して間もなく、ある交通事故の救助現場に出動しました。車のフロント部分がつぶれ、男性が意識無く、顔面を強打し口唇部も損傷して、足を挟まれていました。救助隊が救出をしている間に、なすすべもなく呼吸が止まり心肺停止になりました。

何もできなかったことを先輩から叱責され、何もできなかったことを悩み、寝ているときも起きているときもその場面が目の前に浮かび、その救急現場が頭から離れなくて、自己嫌悪の日々を過ごしていました。

そんな日々が1か月ぐらい続いたころ、トラックの助手席で男性が急に意識が無くなり、出張所に立ち寄ったという現場に応援出動しました。先着の救急隊か

らC P A (Cardio Pulmonary Arrest:心肺停止)の報告がありました。研修所の仲間との合言葉は「V f (Ventricular fibrillation:心室細動)は恋人、V fを見逃すな」でした。ところが、当時は特定行為の指示が無ければ除細動は打てず、指示のシステムも整っていませんでした。

出動途上に指示要請病院に連絡し、状況を話して指示を取り、除細動の準備をして現場に到着、すぐにV fを確認して除細動を3回かけて心拍が再開しました。救命センターに収容が決まり、搬送途上に意識はありませんが自発呼吸が確認でき、病院に収容しました。

1か月後の予後調査で、救命センターの医師から「軽い認知の障害はまだあるが、救命できた症例です」と回答をもらい「私でも助けることができた」と、自己嫌悪から脱出することができました。

その事例は隊のモチベーションを上げました。個々の手技の向上や隊活動の想定訓練をやりながら、隊員の手は心臓を動かすゴッドハンドなのだと称えました。次の出動から機関員は「助けましようね」と声をかけてくれるようになりました。

その後は一つ一つの事例に向き合って、私の判断は正しかったのか、処置が正しかったのか、病院選定どうなのかなど、研修所の教授や救命センターの先生に回答を求めるようになりました。まだメディカルコントロール体制がない時代でしたから、個人的な事後検証です。そしてその答に一喜一憂し、命の重さを痛感したものです。

また、「救急隊は医者ではないから、早く医者の手引きに引き渡せばいい、どんな医者も医者だ」という同僚に対し「医者にも病院にも技量に格差があるから、助けられる病院に搬送しなければだめだ」といった議論をしたりしたものです。

我慢も戦法の一つ

石原会長 何となくだるいと言って救急要請された女性を直近の二次病院に搬送したことがありました。会話も可能で苦しそうな顔つきでもなく、物静かな女性でした。直近の総合病院が受け入れ可能であったこともあり、背景、病歴なども聞かずに病院に搬送しまし



2017 (第21回) J F F W交流会 (京都) (本誌2018年4月号)



2019 (第23回) J F F W交流会 (横浜) (本誌2020年1月号)

た。その日の夜、別の患者さんをその病院に搬送した際、顔見知りの看護師から「昼の患者さんがさっき亡くなったのよ」ということを知らされました。なぜ?

絶句しました。「血液検査の結果、血色素量が4だったのよ」ということでした。えっ、この病院でよかったのか?

この件についても個人的に事後検証をしましたがデータがなく、血色素量が4ということでは何も分かりませんでした。分かったことは、私が1年間に約700件の救急出動をして、通り過ぎた1件にその人の人生を左右する1件が入っているということです。

今でこそこの大学病院にも心臓外科があります。が、当時は市内の病院に心臓外科はなく、隣の市に心臓外科の専門病院ができたばかりという時代でした。その病院から「心臓ホットラインを開設したのでぜひ利用してください。心筋梗塞、解離性大動脈溜の疑いには当病院を利用してください」などと書かれたセールスファックスが消防署に届いていたことを思い出しました。心臓外科があるんだと目に留めたものでした。

数日後の夜、70代の男性が胸痛と左背部痛で救急要請してきました。現場に着くとその男性が家族に付き添われて自宅前に立っていました。胸痛と背部痛、心筋梗塞か？ と思い、車内収容してバイタル測定を行い、念のため左右の腕で血圧を測定しました。左は112、右は158。血圧に左右差がありました。「背中を押されるような感じはありませんか？」と問うと「なんとなくそんな気もする」と言います。大動脈解離の疑い、緊急手術が必要かも知れない、心臓外科のある病院に行くべきと考えました。

しかし、家族は市内の大学病院を希望していました。そこには心臓外科がありません。ファックスが届いていたあの病院へ行こう、と判断し、ホットラインに連絡し収容してもらいました。家族には「なぜ市内の大学病院ではダメなのか」と疑問を持たれました。市内の立派な建物の大学病院は家族にとって頼もしい病院であるという様子でした。その家族に、患者さんにとっては（遠方であっても）心臓外科のある病院が必要であると説得し、到着した心臓外科の待合室で再度説明を行って病院から引きあげました。

翌朝、消防署に病院の医師から「大動脈解離の診断、すぐに人工血管置換手術を行い、無事緊急手術が終わった」という報告のファックスが届きました。その2週間後、患者さんが無事に退院したことを伝えるファックスが届きました。患者さんと家族が喜んでいて、ということでした。

疑問をいなく家族を説得してでも専門の病院に連れて行ってよかった、と安堵しました。「助けられる病

院に搬送しなければ助からない」という思いを改めて強くしたものでした。

当時はまだ指示要請のホットラインがなく指示に時間がかかり、三次の救命センターもなく、C P Aの収容にも時間がかかって、命が繋がらないことに地団駄を踏み、何とかならないのかと思っていました。

そんな時、千葉県救急医療研究会の症例発表のチャンスが回って来ました。そこで、そんな実情を訴え救命センターとホットラインを繋げたいと担当課の上司に話したところ、消防局長の了解を得て発表することができることになりました。

この症例発表が先生方の心を動かし、意見交換会の席上で「大変だね、少しでも力になるよ」と言っていただくことができました。その発表を機に、当市を囲む隣接市にある3つの救命センターと指示要請の協定を締結し、ホットラインで指示がもらえるようになりました。

その後は、救急に関わる学会、シンポジウムなどの勉強会に参加しました。J P T E C (Japan Prehospital Trauma Evaluation and Care：一般社団法人J P T E C 協議会)の前身であるP T C J (Prehospital Trauma Care Japan)が始まり、外傷処置の重要性が謳われるようになり、鳥根県の出雲市までインストラクターコースを受けにもいきました。

自分なりの救急救命士像を求めながらも葛藤もしていました。もっと学びたい、と一生懸命やればやるほど、家庭との両立に壁が立ちました。仕方なく家庭との両立をするため、片目をつむりながら仕事をすることにしました。もっともっとやりたいことはたくさんあったのですが、私にとっては我慢も仕方のない戦法の一つでした。そして黙々と救急救命士として日常の災害に出動していました。

予後は考えずに全力で取り組む

本誌 救急救命士の救急隊長としての活動で印象に残っている事例について聞かせてください。

石原会長 私が印象に残っている事例に肺水腫の患者さんの事例があります。1件目は、喘息発作による要請でした。現場に到着すると、高齢の男性が仕事先で静かに座っていました。会話可能で、安静にさせて車

内に収容し血圧を測ったら最高血圧（収縮期血圧）が200を超えていました。酸素投与しての搬送の途中に、車内で意識を失い呼吸が止まりました。器具を使用して気道確保をして人工呼吸をしながら救命センターに搬送しました。肺水腫でした。その後集中治療室に入院し、予後がよく一般病棟に移り、無事に退院しました。

2件目は、現場到着時、中年の男性が苦しうに自宅前で立っていた事例です。呼吸苦の状態です。車内に収容し、高濃度マスク全開で酸素投与しました。サチュレーションが測れない状況でした。肺水腫だと思いました。頑張ると背中をたたきながら、救命センターに収容しました。ベッドに移しストレッチャーを片付けて処置室に戻ったら、C P Aになっていました。肺水腫でした。病院に到着するまでは受け答えができたのになぜ、と思いました。

3件目は、現場到着時、男性が自宅前で座り込んでいた事例です。呼吸苦の状況から肺水腫だと思いました。高濃度マスク全開で酸素投与し、車内で頑張ると声をかけて、何とか救命センターに搬送し、ベッドに移すために体を横にした瞬間に意識がなくなり呼吸が止まりました。すぐ気管内挿管をして処置をしたが、意識も呼吸も戻りませんでした。検査の結果、腎不全が悪化して、溢水でした。

そしてもう一件、雑居ビルの階段が上がっていくとホールで男性が苦しうにいた事例があります。ピンク色の流涎がフロアに流れ、顔面蒼白、サチュレーション70パーセント台。肺水腫だと思いました。酸素投与し、車内収容、救命センターに電話をしました。「肺水腫疑い呼吸苦の男性、バグマスクを準備します。収容していただけますね!」。有無を言わず、電話の向こうで「はい」。車内でサチュレーションが徐々にあがって落ち着きました。

病院に着くと「さっきはすごい剣幕だったけれど落ち着いたみたいだね」と医師に声をかけられた際、「私、肺水腫は2勝2敗なんです」と答えました。いくら助けたいと思っても助からないものは助かりません。厳しい状況であっても助かる人は助かります。予後は考えずに全力で取り組むしかないので。

アンコンシャスバイアスと向き合い続ける



「私は大丈夫」「私は問題ない」と思いこまないこと

- 100人が同じでも、101人目は違うかもしれない
- 同じ人でも、過去と今では違うかもしれない
- ひとりひとり、その時々とむきあうことを大切に

(C) Copyright All Rights Reserved. 株式会社 アンコンシャスバイアス研究所

2020年10月31日に開催されたJ F F Wオンライン交流会（第24回交流会）では、消防庁消防・救急課長の石山英顕氏によるビデオメッセージのほか、一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所代表理事の守屋智敬氏による講演「無意識の思い込みを知ろう～ひとりひとりがイキイキと活躍することをめざして～」が行われた。上の図は講演におけるスライドの一部。司会は株式会社モリヤコンサルティングの太田博子氏が務めた。参加者は75名。参加者からは「アンコンシャスバイアスへの理解が高まった」のほか、「オンラインの手軽さと可能性を感じた」、「コロナ禍でも顔をみながら交流をすることができ、元気が出た」等の感想が寄せられた。次の交流会は青森県での開催を予定している。

消防指令センターで勤務

本誌 救急隊で活動したのちに勤務された指令課での業務についてお聞かせください。

石原会長 50歳を過ぎた頃、現場の救急隊から本部の救急課に異動になりました。救急課では、救急隊や救急救命士の教育指導、活動記録票の見直し、MC関係の事務など、救急業務全般の仕事を担当していました。

救急事案管理システム構築に携わったことで、O Aシステムの勉強をしました。

その翌年には管理職になり、このまま救急業務の担当が続くものと思っていたところ、3年で指令課に異動となりました。共同指令センターになる前で消防局内の指令課、当直責任者の代行です。

指令業務は苦手だと思っていましたが、119番通報の声は救急業務のスタートであり、口頭指導や病院情報、受け入れ状況など、気になるところでした。夜中は2名で通信勤務を行っていましたが、災害の指令を出すことでは、いつも不安を抱いていました。

2年間指令課に勤務し、やっと慣れてきたところで救急課に戻りました。ところが、市川市も含む6市の指令業務を共同で運用する千葉北西部消防指令センターが開設され、翌年にはそこへ派遣されることにな

りました。指令センターの要望する派遣職員は、救急救命士資格者、副管制長職位、女性職員というもので、自分はそのすべてに該当していました。業務は副管制長として指令統制をする指揮台での業務でした。

指揮台者は、何本も入ってくる119番の内容を聞き分け、場所、出動隊が間違いなく指令されているかを確認します。災害が重なれば、指令員を振り分けて災害統制します。構成6市から容赦なく災害通報が入ってきます。火災が、救助が、ドクヘリ要請が重なってきます。追加要請があった時など、管制員が事案を取り違えることもあります。それをチェックして訂正する、油断のできない業務です。多くの119番通報があって管制員が取り切れなくても、指揮台に座る者はそれをとってはなりません。ついとってしまい、ミスを防げなかった苦い経験もあります。

その後翌年に指令管制長、3年目に副センター長を務めました。

消防の仕事を好きになって

本誌 今後の社会背景等を踏まえ、後輩の若い消防職員へのメッセージをお願い致します。

石原会長 今回私はいろいろな質問にお答えしながら自分の消防人生を振り返ってみました。

消防という組織の中で、全速力で走ったり、停車したり、徐行したりしながら終着駅まで歩んできました。消防の世界では女性であるがゆえに理解されない時もありましたがそんな時は仕事を見つめ、市民のためによいと思うことを選択する物差しを持って働ければそれでよいと言い聞かせながら切り抜けてきました。課題があれば解決するために努力し、そんな環境の中で生き抜くために自分自身とも戦いました。

それでも不思議と消防の仕事を嫌いだと思ったことはありません。むしろこの仕事が好きだし、素敵な仕事だと思っています。好きな仕事をしながらライフイベントを楽しみ人生を歩いてこられたことに今は満足しています。現在、女性消防職員の更なる活躍の推進に向けた取組みが行われ、各消防本部において計画的な採用・増員がなされていると思われます。

採用された皆さんはまずは始発駅に立ったところで。始発駅的环境は様々です、大きな駅や小さな駅、



千葉北西部消防指令センターで副センター長として勤務（後列）

環境が整っている駅もあれば、まったく初めてで対応に戸惑っている駅もあると思います。どんな駅にも立つことができる柔軟な心を持ってください。

また採用した側にとっても女性消防職員の職域が拡大され、女性消防職員がどんな職域にも就くことができるようになったものの、実際には救急救命士になりたい、救助隊になりたいなど、自分のやりたいことを理想として就職してきた職員の希望をかなえることができない状況、あるいは実際にその職域に就かせたものの職員が理想と現実の隔たりを感じ目標を見失うといった状況があると思います。

それでも皆さんは住民の生命・身体・財産を守る消防士だと思ってください。そしてこの仕事を好きになって、ライフイベントを楽しみながら歩いていけるキャリアプランを描いてほしいと思います。選択肢はたくさんあります。結婚、出産、子育て、予防業務、警防業務、救急業務、指令管制業務などを柔軟に選択して、人生のレールを引くことを考えて下さい。仕事に人生にプライドを持って胸を張り一生懸命努力していると、誰かが応援のエールを送ってくれます。

「しなやかに、したたかに、微笑みながら」はJFFWのキャッチフレーズです。この言葉を頭の片隅に入れて、時には全力疾走で、時にはゆっくり、たまには立ち止まって終着駅まで歩いて、駅に立った時っこり微笑んでいてほしいと願っています。